

# 東京都区部の商業言語景観にみる多言語使用の実態と課題

朝日祥之(国立国語研究所) 黄叢叢(明治大学大学院生) 呉梅(明治大学大学院生) 星川睦(明治大学大学院生)

## 1. はじめに

本稿では、東京都区部における飲食店を対象とした商業言語景観調査の結果をもとに、多言語化の実態を報告し、調査地区で定められた公共サインガイドラインとの関連性を考察する。

東京都に居住する外国人、並びに観光客の数は、年々増加している。私たちの生活において、公共標識とともにその景観を形成するものに、観光施設、宿泊施設、飲食店をはじめとする商業施設がある。こうした商業施設の看板における言語使用については、東京都の、特に外国人居住率の高い地域（大久保地区など）を対象とした調査研究（金 2005；吉田 2018 など）がなされてきた。

本発表では、外国人居住率が東京都で最も高い新宿区とそれに隣接する中野区を調査対象として定め、2021年3月に、新宿区の大久保駅から新大久保駅の地区（以下、大久保地区）、中野区の中野駅周辺地区（以下、中野地区）における悉皆調査を行なった。調査によって得られた画像のうち、最もその割合の高かった飲食店の写真データを分析に用いる。

以下では、2節で本発表で用いるデータの収集方法について述べ、3節で言語景観について、飲食店名に使用される文字種と表記バリエーションに関する分析を行う。それを踏まえ、4節で公共ガイドラインとの関連性について考察し、5節でまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 分析に用いるデータ

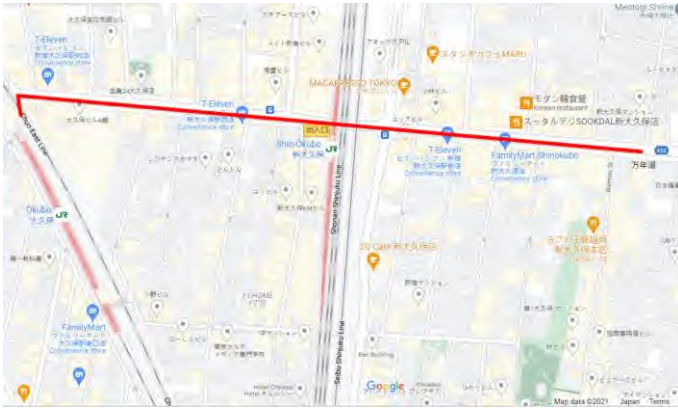
以下に本発表で用いるデータの概要を示す。

- 調査時期：2021年3月15日（中野地区）、3月31日（大久保地区）
- 調査地域：大久保地区・中野地区（詳細は資料1、資料2を参照のこと）
- 調査方法：商業看板のうち、通りに面したものを全てを撮影。複数階ある建物の場合、地上階から撮影した（資料3、資料4参照）。撮影にはスマートフォンのカメラ機能を用いた。
- 収集した写真：1,124枚（大久保地区 445枚、中野地区 679枚）
- 調査地域店舗における飲食店の割合：38.2%（大久保地区）、31.1%（中野地区）
- 飲食店：料理種別の分類に基づく（表1）。なお、店名に地名・人名・数字・記号が含まれるものは分析の対象から外す。

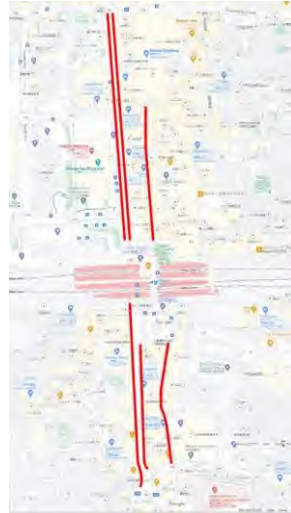
表1 料理種別による店舗数

	日本料理 (和)	西洋料理 (洋)	中華料理 (中華)	韓国料理 (韓)	その他 (その他)	合計
大久保	21	12	9	56	6	104
中野	88	28	6	0	8	130
計	109	40	15	56	14	234

[資料1] 撮影地区(大久保地区)



[資料2] 撮影地区(中野地区)



[資料3] 大久保地区



[資料4] 中野地区



### 3. 分析

本節では、飲食店の看板に見られる言語景観の特徴を把握するために、(1) 文字種の延べ数から見た特徴、(2) 飲食店名に用いられる表記バリエーションから見た特徴を分析する。

#### 3.1. 文字種から見た飲食店名の特徴

初めに、大久保地区、中野地区における飲食店の看板からそれらの店名にあたる箇所を抜き出し、文字種により分類した結果から示す。ここでは、各文字種(漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベット、ハングル)の延べ数を料理種別に示す(図1、図2)。

文字種別に各料理種における割合を見ると、「漢字」は大久保地区、中野地区ともに中華料理の店名で使用されている割合が最も大きく、次いで日本料理の店名における割合が大きい。「ひらがな」は日本料理の店名における割合が両地区で最も大きい。ほかに、大久保地区では「その他」、韓国料理、中華料理での店名に使用されているが、中野地区では中華料理と西洋料理の店名でわずかに使用が認められるに過ぎない。「カタカナ」は両地区で西洋料理と「その他」の店名での割合が大きい、大久保地区ではそれらに加えて韓国料理の店名での割合が大きい。「アルファベット」は両地区とも西洋料理と「その他」の店名で割合が大きいことは一致しているが、さらに大久保地区では韓国料理の店名、中野地区では中華料理の店名において、それぞれ割合が大きいことを指摘することができる。なお、大久保地区の中華料理の店名には「アルファベット」の使用は認められなかった。最後に「ハングル」は大久保地区の韓国料理の店名のみで使用が認められるが、全体の1割程度にとどまっている。

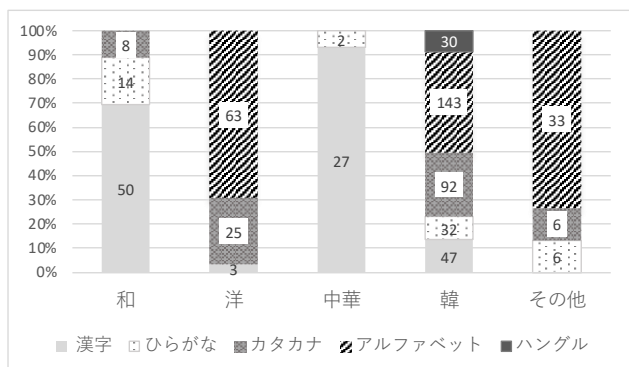


図1大久保地区における料理種別の各文字種延べ数

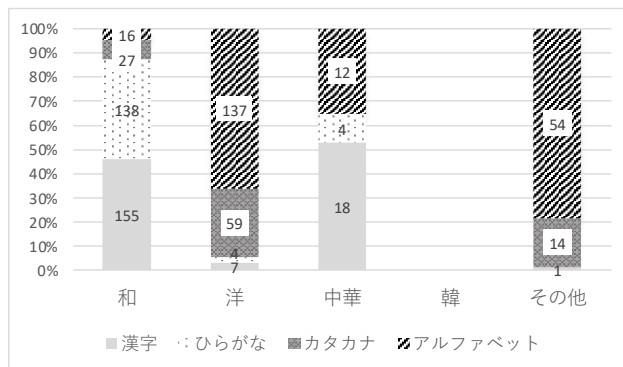


図2中野地区における料理種別の各文字種延べ数

次に、中野地区の調査対象域には韓国料理店がないことを踏まえて地区ごとの特徴を比較すると、大久保地区の中華料理の店名にアルファベットが用いられないこと、「その他」の店名において大久保地区では「ひらがな」が用いられることを除けば、両地区の文字種使用に大きな差異は認められない。両者の差異を生み出しているのは、大久保地区における韓国料理店とその店名における文字使用であろう。その文字種使用も他の種類の料理を提供する飲食店とは異なり、文字種の種類も多い。大久保地区の特徴的な言語景観を形成するのは、この多様な文字種使用にあると考えられる。

### 3.2. 飲食店名の表記バリエーション

本節では、大久保地区、中野地区における飲食店名に見られる表記バリエーションを分析する。前節同様、各地区における飲食店を料理種別に分ける。ここでは、店名に用いられる表記の種類を漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベット、ハングルのいずれかの文字種のみを用いる単一表記と、それらを複数種類用いる複数表記とに分けた上で、それぞれの店舗数（図3、図4）の割合を確認する。さらに、単一表記のバリエーション（図5、図6）と、複数表記のバリエーション（図7、図8）の割合を示す。

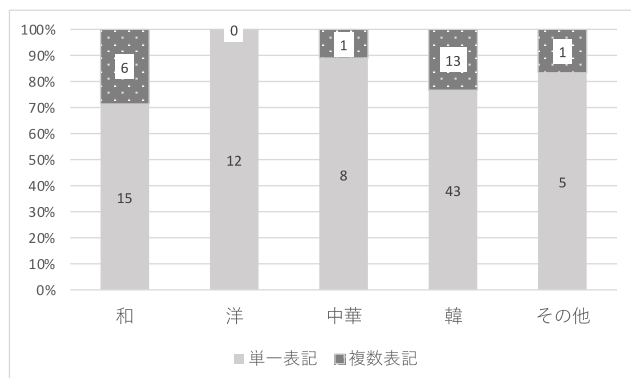


図3大久保地区における店名表記の種類

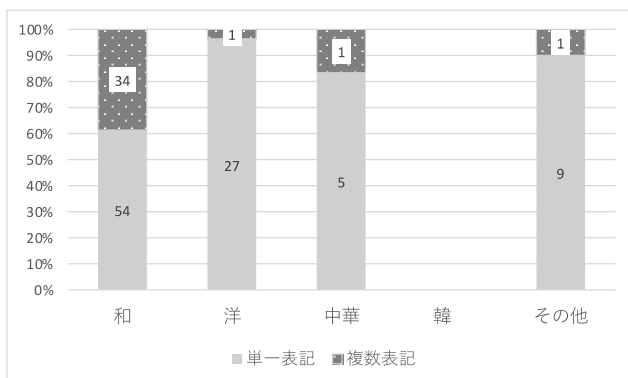


図4中野地区における店名表記の種類

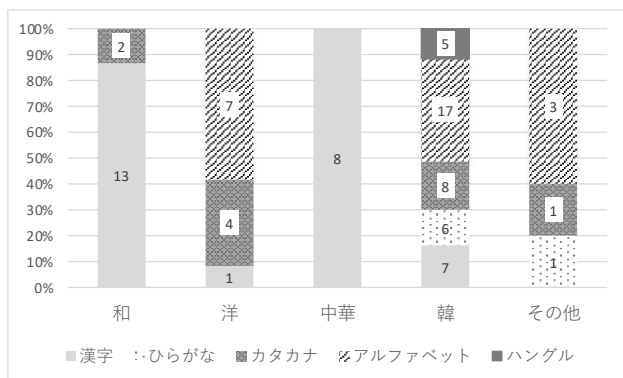


図5大久保地区における単一表記バリエーション

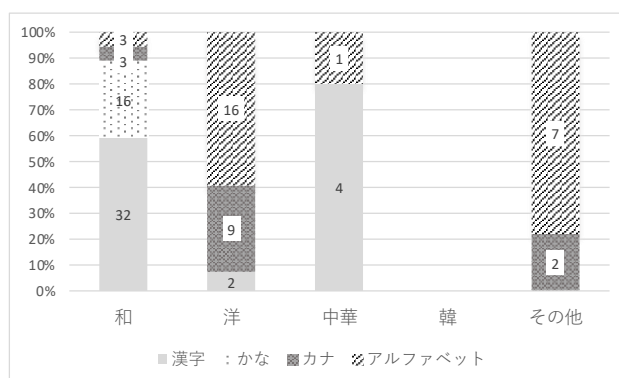


図6中野地区における単一表記バリエーション

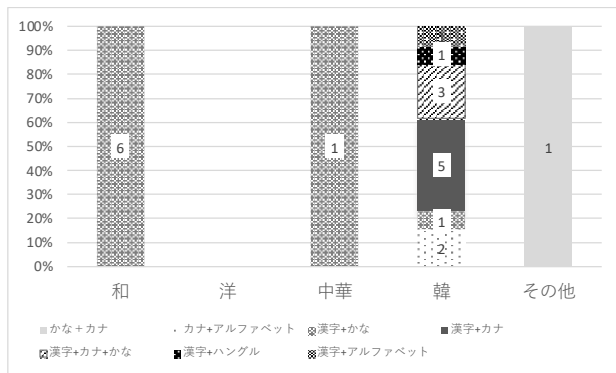


図7 大久保地区における複数表記バリエーション

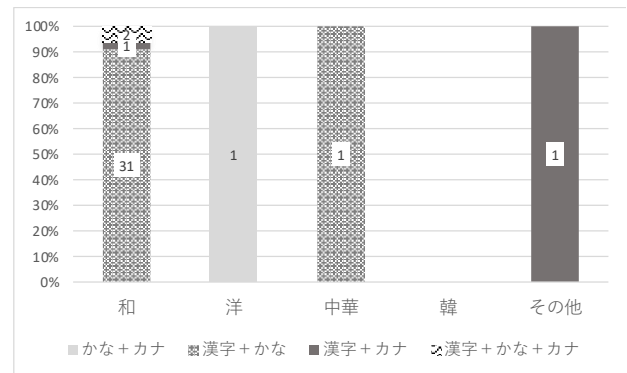


図8 中野地区における複数表記バリエーション

最初に、大久保地区と中野地区における飲食店名の単一あるいは複数表記の割合を図3と図4から見ると、両地区とも単一表記の店名が多い。西洋料理の店名はその傾向が強く、複数表記は1店舗のみである。また、3.1節で見たように、様々な文字種が選択される大久保地区の韓国料理の店名も、基本的には単一表記の店名が多いことがわかる。

次に単一表記の文字種ごとの店舗数を図5と図6から見ると、西洋料理の店名ではアルファベットが最も多く、それにカタカナ、漢字が続くことが両地区で共通している。また、中華料理も漢字が主に用いられる点で共通している。一方で、日本料理の店名においては、大久保地区では漢字とカタカナが用いられるのに対し、中野地区ではひらがな、アルファベットも使用される傾向がある。韓国語については、図1の結果と同様、全ての文字種が用いられていることがわかる。また、複数表記（図7、図8）は、全体的に数が少ないが、日本料理と中華料理で「漢字+かな」の割合が大きいことが特徴的である。この他、大久保地区の韓国料理店では、「漢字+カナ」の割合が最も大きく、次いで「漢字+カナ+かな」の割合が大きい。

#### 4. 公共ガイドラインとの関係

ここで、公共標識のあり方をまとめた「公共サインガイドライン」との関係を見る。これに関連するものに「中野区公共サインガイドライン」（中野区）、「屋外広告物に関する景観形成ガイドライン」（新宿区）がある。それらにおいては、公共標識には英語と日本語を使用することを基本とし、地域（または地区）によって中国語や韓国語などを採用するとされている。これに対し、本発表で取り上げた商業言語景観は、文字種の実態から見た場合に、公共標識の表示形式とは異なる諸相が見られることが明らかになった。

#### 5. まとめと今後の課題

本発表では大久保地区と中野地区における商業言語景観を飲食店の看板で用いられる文字種と表記バリエーションを手がかりに考察した。地区を特定する形での言語景観だけではなく、近隣地区の景観との対照を行いながら、地区ごとの言語景観の特性を考察する意義はあると考える。今後もその対象地域を広げ、考察を深めていきたい。

**謝辞** データ収集には仲村怜氏（明治大学大学院生）も参加した。ここにお礼を申し上げる。

#### 参考文献

- 金美善（2005）．言語景観にみえる在日コリアンの言語使用 真田信治・生越直樹・任榮哲（編）在日コリアンの言語相 和泉書院。
- 吉田さち（2018）．新宿区大久保地区のコリアン系店名看板についての一考察 コミュニケーション文化，12，70-83。